フィールド（現場）からの風 ⑲②

宮田守男

大規模な災害等で活躍する自衛隊に関心を持ってみませんか

7月1日、白馬商工会会議室で開催された白馬村自衛隊協力会の総会に出席した。

自衛隊は、平成28年防衛ハンドブックによると、統合幕僚監部3200名、陸上自衛隊13万8200名、海上自衛隊4万2200名、航空自衛隊4万3100名、総勢22万6700名の国を守る屈指の組織だ。

この平和日本の防衛にあたる自衛隊に対して、激励と精神的な支援を行うために協力会が組織され、相互の理解を深めている。白馬村も厳しい山岳地形や目まぐるしく変わる気象が災いする事変や、過酷な条件下の中、高いレベルが要求される国際的なスキー競技会等に支援を頂いている。

総会・講演会に後藤孝長野地方本部協力本部長、山本善之第13普通科連隊（松本）中隊長、青木泰男松本駐屯地広報室長が出席。後藤さんと目が合い、懐かしさにお互い会釈。97ワールドカップ女子滑降競技や98冬季オリンピック男子滑降競技の折、第13普通科連隊（松本）第1中隊長として大会成功に大活躍した当時を懐かしく思い出す。防衛幹部を歴任、24年に第13普通科連隊長、兼ねて松本駐屯地司令、奥様が塩尻出身で、長野県関係者では陸上自衛隊では最上位幹部だ。

今年、白馬から2名が自衛隊員に、来年・再来年の希望者もあるとの情報。地域を守りたいとの意識が再認識されているとうれしくなる。後藤さんは、階級でいえば、旧陸軍の大佐の位。一昔前は、一般人が気軽に話す機会さえ無かっただろうが、交流会場で、昔話で盛り上がるのは、今私たちが平和で幸せな毎日を送れているからなのだろう。

当時の自衛隊のスキー会場での場面の懐かしさが込み上げてくる。支援当時、ジャンプ会場のランディングバーンのスキー板による踏みつけ。きつい斜面に思うように行動できない隊員の要望で、作業が終了してから、雪上訓練に励む姿。そしてオリンピックでは、競技実施が、無理と思われた気象条件の中、無事競技開催を成し遂げ、世界のスキー関係者を驚嘆させた現場があった事。事前の緻密な行動計画により作業を続けた自衛隊は今も忘れる事はできない。災害現場での効果的な活動計画は、地元での情報収集力だ。そのために自衛隊と、どの様な距離感が必要なのか平常時から考えたいと思った1日でもあった。

（NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上）

災害時は24時間、不眠不休の態勢との後藤さんの説明は、地域関係者に信頼感を倍増させた